

山田 龍雄

(よかネットNO.26 1997.3)

J R日豊本線で別府市に入って最初の駅が亀川駅であり、この駅周辺の街を“亀川”という。

亀川は“別府八湯”のひとつとして昔は賑わっていたが、今では鉄輪温泉の方が別府温泉の中心となり、駅東側の旅館街は少しうら寂しい雰囲気となっている。一方、駅西側の方は戸建て住宅やマンションが建ち、昔の駅裏が中心の街となってきた。

パチンコ店も移動式イスを設けている

仕事の関係で、私が初めて亀川を訪れたのは今から約3年前の秋頃だった。亀川には「社会福祉法人：太陽の家」とその関連企業に約千人の障害者が働いている。関連企業が並んでいるメインの通りには、車椅子の人など、多くの障害者の人たちが目に付く。普段の街ではみられない光景であったことを、今でも思い出す。

「太陽の家」の前の通りにはちゃんとした歩道はなく、一見すると障害者などに配慮した街には程遠いようにみられたが、近くにある商店街を歩いていると何気なくスロープが設置されているのに気が付く。また、駅前のパチンコ店ではすべて移動できる椅子を設置し、車椅子の人が来ても自由にパチンコを楽しむようにできている。店長に聞くと、週末には1日20人程度の障害者の方が来ているという。

「太陽の家」が経営するスーパー「サンストア」は、太陽の家の従業員をはじめ、周辺の住民も利用しており、車椅子利用者（お客とストア従業員）でも取りやすいように棚は低くしてある。

近頃、「人にやさしいまちづくり」といって公共が先行して、高齢者や障害者等に配慮したハード整備を実施、誘導している都市が多くみられる。しかし、亀川は、民間が障害者のために自主的にハード整備をしてきたという、全国でも希なところといえよう。これは、まさに「太陽の家」設立の思想と歴史によるものなのである。

「チャリティーより働く機会を」がモットー

「太陽の家」創立のいきさつについて「太陽の仲間たち（講談社、著者：畑田和男理事長）」より抜粋すると、概ね次のようなことが記されている。

- ・この施設の創立者である中村裕先生は、昭和35年にアメリカ・ヨーロッパのリハビリテーションの実情を視察し、日本と西欧諸国との大きなギャップに愕然とし、その立ち遅れに挑戦することとなる。
- ・当時、すでにストーク・マンデビル大会として車椅子の国際スポーツ大会を開催していたグッドマン博士の「手術よりスポーツ」によるリハビリテーションが多くの人々の社会復帰を出している根源とつきとめ、これの熱心な普及に尽力した。
- ・昭和39年の東京オリンピックの年に、第2回パラリンピックが開催され、この東京大会の開催に心血を注いだ。
- ・作家の水上勉氏に協力を依頼し、昭和40年10月に「太陽の家」を創設。保護や慈悲による日本の福祉を変えなければならないとの一心であり、『チャリティーより働く機会を』をモットーにした。社会に対しては『世に心身障害者であっ



図表1 亀川的位置



移動式椅子が置かれているパチンコ店



自主的に設置されたスナックのスロープ



ボタンが押しやすいように棒が付けられた自動販売機

でも仕事の障害はありえない。太陽の家の社員は被護者ではなく労働者であり、後援者は投資家である』と啓蒙し、仕事の提供を探す日々が続いた。

- ・当初は、簡単な竹工芸や木工といった利益の少ない仕事しかなく、自立するには遠い道程だと思われた。
- ・その後、評論家の秋山ちえ子女士をさそって、オムロン(株) (当時は立石電気(株))の社長室を訪問し、立石社長のオムロン太陽の家設立の意志決定をみた。

- ・障害者の必死の頑張りにより1年目から黒字を出し、この業績をみて、その後ソニー太陽(株)、ホンダ太陽(株)、三菱商事太陽(株)、デンソー太陽(株)、オムロン京都太陽(株)、ホンダアールアンドデー太陽(株)が次々と共同出資の会社を設立することになった。

- ・太陽の家の共同出資会社の多くは、施設入所者だった重度障害者が取締役工場長となっており、経営に参画し、立派に企業人として社会的使命を果たしているのである。

このように障害者が働き、自立して生活しているからこそ、商店街やパチンコ店も障害者の方を無視しては商売が成り立たない街となっているのである。地元には、商店街の経営者を中心としたまちづくりの集まりで「さんもく会」というのがある。この集まりにも「太陽の家」の代表者も参加し、まちづくりについて議論をしているようだ。

#### 障害者の人が働くための生活援助員

昨年、「太陽の家」でホンダ太陽(株)、オムロン太陽(株)など工場働く障害者の方を視察する機会があった。ホンダ太陽(株)ではターンシグナルキャンセルカム(車の左折、右折が終わったときに自動的にウィンカーを消す働きをする部品)を創っていた。これは通常両手作業でも指先の力を必要とされるため、健常者にとっても数をこなすのは辛い作業であるといわれる。しかし、手指機能の弱い人でも作業ができるように固定治具、専用治具の使用、あるいはラインの改善などによって障害者でも効率よく作業が進むようにしていた。このような改善については、障害者の人たちが自ら研究、開発するとのことであった。

ある部屋では手の不自由な方が足でコンピューターのキーをたたいており、用事がある時には生活援助員の方がサポートしている。

また、ここでは障害者の方が、健常者のパートの方を指導するそうで、最初は違和感があるよう

だが、これが当たり前になってくるとのことである。ここでは健常者と障害者という言葉の違いはあまり意味をなさないようである。

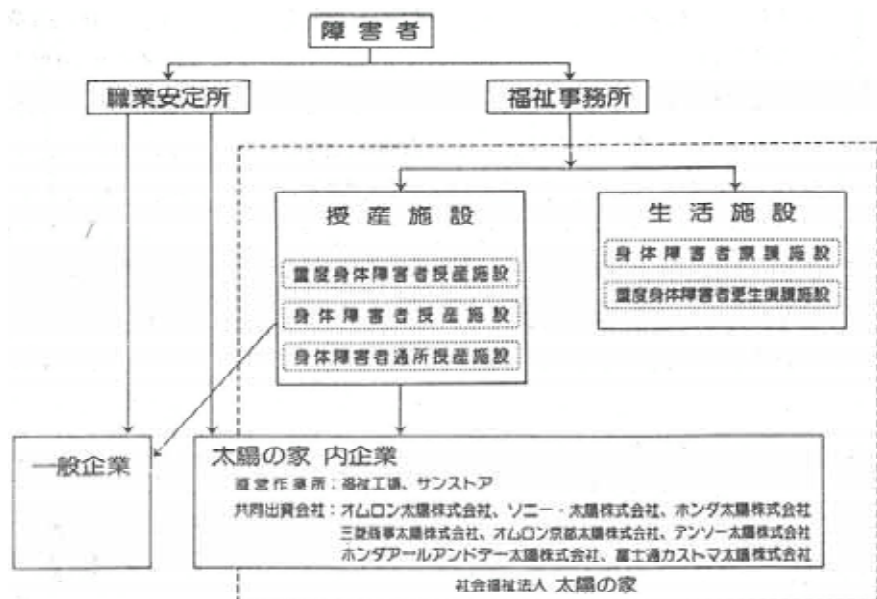
本当のハード整備はこれから

最近では、民営の亀の井バスが亀川地区にリフトバスを1日12本運行するなど、徐々に公共機関での整備が進み始めている。

市の方は、平成7年度には「人にやさしいまちづくり事業」に取り組み、亀川の高齢者や障害者等に配慮したまちづくりのあり方の計画を行い、さらに平成8年度には、引き続き「人にやさしいまちづくり」の重点プロジェクトとして位置づけられる「亀川駅の基本設計」など、遅ればせながら行政が主体となって道路や駅舎など公共施設の整備への取り組みを行い始めている。

これから、ハード先行で徐々に高齢者や障害者等が住みやすい、移動しやすいきれいな街ができるかもしれない。しかし、障害者が街に出てこない、あるいは地域で生活しない街であっては何のための整備であるのかわからない。やはり、基本は亀川でみられるように障害者であっても社会の

一員として生活できるような雇用の場があること、あるいは障害者であっても楽しく遊べるような場があることなど、ソフトを含めてのまちづくりと連携してこそハードも生きてくるものと思う。



図表2 太陽の家の構成